

第六十八回コスモス賞

自肅の街

新潟 黒石 孝

ずつと菜の花

静岡 榛葉 貞代

右の通り贈ることを決定した。

令和三年八月

コスモス短歌会

黒石孝の作品について

黒石孝さんは、新潟県糸魚川市の人である。一九五二年生まれで、一九八三年にコスモスに入会し、一九八七年には「柵口雪崩」で〇先生賞を受賞している。この受賞作は、多くの死者を出した雪崩の現場で地元の消防団員として救助に当たった体験をリアルに詠んだものであった。以後三十余年たち、作品には生の厚み加わったが、深い郷土愛は変わることなく作品に流れ続けている。

目はコロナ禍以前の作品で、多発する廃業を座視するしかない金融機関の会議の重苦しい雰囲気伝わる。二首目、融資先の多くは零細企業であろう。苦境に陥った経営者はもちろん、従業員の状況なども踏まえた上での融資である。判断を誤れば金融機関としての存続にかかわる。ぎりぎりの決断を迫られることが多いと推察する。

廃業の数とどめなく策もなく会議の窓を初霰打つ

商ひのいのちを繋ぐ融資せり返るあてなき事情も呑みこみ

雪で稼ぎ春に清算する習ひ雪解け勘定残る魚沼
馬鞍田、深田、谷の田、瓢箪田、むかし柵田の跡を辿りぬ

黒石氏は、現在糸魚川信用組合の理事長である。地方では少子高齢化、過疎化が進み、経済の衰退の危機に直面している。一首

糸魚川市は新潟県の西端に位置し、富山県、長野県と境を接している。「雪解け勘定」という独特の言葉を生んだ豪雪地帯・魚沼地方（宮柵二の故郷）にも遠くない。二首目に並ぶのは、いか

にも鄙びた地名である。「親不知」の險路もある辺陲ともいえる地域だが、黒石さんはこの風土を愛してやまないののである。

花火師の女子が手縫ひの布マスク花火花咲く刺繡うつくし

産土の食味は風土早春の海に足浸け石専探る人

年ごとに畝の数減る山畑に夏来て老女ひとり歛振る

女性花火師(花火産業はコロナ禍で打撃を受けた)が作ったマス

榛葉貞代の作品について

榛葉さんは一九四三年静岡県島田市のお生まれ。コスモス入会は一九九八年であり、その一集には二〇〇三年に、月集シリウスには二〇一二年に昇級している。また二〇〇九年には歌集『マンタがよろし』を出版している。

受賞対象となった二〇二〇年の作品に注目すると、家族のことや身の回りの自然のことなど身近なところに題材をとっている歌が多い。

よく笑ふ子だくさんの家の風呂のやう軽トラックにキャベツ
積まれて

花蛇も天道虫も菜の花の黄に溺れをり夕陽がしづむ

幾度も夕焼け空を蹴り上げてなつちやん逆上がり練習中なり
多くの人が目になっていること、感じていることを詩の世界に広げていく。次の作品もそんな一首である。

茹で菜花くるりと巻けば黄の透けて生春巻はうす花明り

春巻を巻くキッチンからひととびに花明りという詩の世界に読

クを褒め、冷たい海に足を浸けてアオサを採る人、山畑でひとり
歛を振る老女に目を留める。黒石さんは金融機関の人だが、作品
からは利を追う姿勢は見えず、目線を低く据えて、共に郷土に生
きる人間を励まし、見守ろうとする。その眼差しはじつに温かい。
このように地方に根を張って篤実に生きてきた黒石さんの作品
が、高く評価されたことを喜びたい。

者をみちびいていく。

また、気持ち具体で表現することにも長けていて、その具体
もごく身近なところから選ばれているので、作者の気持ちが余す
ところなく伝わるのである。

冷やしたる化粧水、ババンと頬に打ちまた会ひにゆく惚けし姉に
迷ふとき自づと触るるメスの痕わが太腿の上下に走る

少し心が悲しい時、心が迷う時の歌である。「化粧水を打つ」

「メスの痕に触る」などしっかりとした具体により、そこから作
者の心の中を読み手に届けるのである。

BGMにモーツァルトを流す店わたしが一人で行ける(蕎麦八)
夫君の逝去から立ち直るために始められた短歌が今は生きがい
であるという榛葉さん。これからも仲間と喜びをわかちあい、的
確な情景描写、比喩をとおして、詩の世界を展開させていかれる
ことを期待している。

白肅の街

第六十八回コスモス賞受賞作品

廃業の数とどめなく策もなく会議の窓を初霰打つ

除雪車がチェーン鳴らして外ゆけり雪降らぬ年明けてどしや降り

けふ雨水田植糸の水が気にかかるいのちの雪を待てどまだ来ず

雪で稼ぎ春に清算する習ひ雪解け勘定残る魚沼

ビルの上に立つクレーンが爪を研ぐ大東京の冬澄みわたり

向かひ席に座る七人内六人スマホ緑りつつ一人爆睡

賽銭はQRコードも可なりとふキャッシュレスの神をろがみまつる

帰省してバイトに励む子のツナギ洗ひつつ妻のよき日々つづく

初孫に会ひに来し奈良のあかるさよ信貴山縁起絵巻観て帰りけり

産土の食味は風土早春の海に足浸け石蓴採る人

雪のなき冬をぼんやり過ごしたる海の若布は今年も不作

擬宝珠の若葉、独活の芽、土手の草 外出白肅して旬を食む

歌生るる疼きにも似てひとところ林の奥に日差しうごける

谷うつぎ咲くを目当てに産卵の鯛の群来る筒石の海

新 濁 黒石 孝

作者感想

本当に思いがけずコスモス賞を頂きました。嬉しさに手放しで喜んでいきます。

コロナ禍で世の中が裏返しになっています。つたようなこの一年、仕事を通じていろんなものを見てしまいました。確実に時代が変わる節目になる筈です。今この事を、この時に生きた証として自分の歌に残したい、また年々衰えてゆくこの地域の人や風景を詠いたいという思いがあります。これは今後とも変わらずテーマであり続けるでしょう。コスモスの皆さんありがとうございました。

眠りし老夫婦、信濃過ぐる頃目覚め田んぼの話してをり
繁みからぬつと顔出し筈の伸びる伸びる五月、八專に入る
四人子の職員の家鈴なりに濯ぎ物干す梅雨の晴れ間を

残りたる担保の土地の広く見ゆ漁具漁網など取り散らかして

商ひのいのちを繋ぐ融資せり返るあてなき事情も呑みこみ

花火師の女子が手縫ひの布マスク火花咲く刺繡うつくし

テープ巻かれ明日は伐らるる合歡の木が枝さし広ぐ蟬を鳴かせて

瘤鯛のおでこのやうな佐渡の島コロナに負けずけふ市長選

集まりて意見合はぬか鴉たちやかましく騒ぐ向かひの屋根に

年ごとに畝の数減る山畑に夏来て老女ひとり鋤振る

農道に鳳仙花咲かせ世話するはあの人だらう杖突きて来ぬ

馬鞍田、深田、谷の田、瓢箪田、むかし棚田の跡を辿りぬ

無利息のゼロゼロ融資押し込みて銀行が走るコロナ禍支援

無利息と言へど借金今のうち借りておけとはいかにも無謀

安倍さんに似て来たと言はれフンツと返す現職十年、まだもう少し

人が消え電飾も点かぬすつびんの自粛の街をゆけば風鳴る



作者略歴

一九五二年 新潟県糸魚川市生まれ
一九八三年 コスモス短歌会入会
一九八六年 第三十三回〇先生賞受賞

ずつと菜の花

第六十八回コスモス賞受賞作品

冷やしたる化粧水パパンと頬に打ちまた会ひにゆく惚けし姉に

「貞代ちゃん私はいつたい何歳いくつなの」惚けし姉がいくたびも聞く

「あの人は見舞ひに来ない」と言はれたる連れ合ひ実は毎日来てゐる

穏やかに旅立つ為の処方箋どこにもあらず 籤は中吉

コスモスを見むとてハンドル切る角に丸型ポストまだ在り ふふふ

海原に囲まれ動けぬ列鳥を逆袈裟懸けに台風が切る

台風の前のコスモス見しゆゑに後の無残も確かめにゆく

ウィッグが飛びはせぬかと抑へつつ菜の花畑のランウェイに入る

踏み入りて屈めば波に浮くごとし背泳ぎしたい菜の花畑

菜畑にぼつんと置かれし手作りの木のふらここに花虻あそぶ

花虻も天道虫も菜の花の黄に溺れをり夕陽がしづむ

ふらここの揺れの向かうに夕陽あり菜の花畑ずつと菜の花

茹で菜花くるりと巻けば黄の透けて生春巻はうす花明り

茹で菜花酢みそで食ぶる夕まぐれ ドクターイエローどこを走るや

静岡 岡 榛葉しんば 貞代さだよ

作者感想

第一回目のコロナのワクチンを接種して帰宅したらコスモス賞受賞の知らせが届いていました。びっくりして、信じられなくて、嬉しくて、押し花の電報を陽に透かしてひらひらと振ってみたりしました。

今回の受賞はせめて欠詠だけはしまいと決め身の回りの小さな出来事をこつこつと詠い続けてきたご褒美のように思いました。夫の夭折から立ち直るために始めた短歌ですが、いまでは私の生きがいとなり、歌を通してたくさんのお友達もできました。コスモス短歌会の皆様、選者の皆様、支部のお仲間の皆様、ほんとうにありがとうございます。

はらはらのコロナ対策「な」の縛り 出るな・群れるな・喋るな・食ふな

ウイルスが潜みてをらむ夜の闇にチロチロチロと猫が水飲む

生真面目な子に作り置くフリフリのフリル多なるワンタンスープ

感染と風評伝ふるテレビ消し『よりぬきサザエさん』寝ころびて読む

山桃の大樹の洞にもものけが潜みてときをり現世をのぞく

少年が本を閉ぢれば凭れぬし山桃の木も眠たいと言ふ

山桃の枝をゆらして実を落とし風になりたり夏のものものけ

処分する本の隙間にふと見える『ちびくろサンボ』の虎の縞々

縁側に花ばあちゃんやんが座りゐて一句ひねれり 柿の葉ひらり

昨日みて今日もまた見る柿雌花くるりんぱつとカールしてゐる

反り返り咲く山百合の花びらの黒き点々を夜思ひ出づ

夫が穫り軽トラの妻に放るとき陽にかがやけりキャベツのお尻

よく笑ふ子だくさんの家の風呂のやう軽トラックにキャベツ積まれて

迷ふとき自づと触るるメスの痕わが太腿の上下に走る

時かけて折り合ひつけしか肉叢と人工関節なじみてよろし

股関節コキリと鳴りて空青し杖なしでゆく南フランス



作者略歴

一九四三年 静岡県島田市に生まれる

一九九八年 コスモス短歌会に入会

二〇〇九年 歌集『マンタがよろし』出版

選考資料抜粋

第六十八回コスモス賞の選考は二〇二〇年の月集・その一集会員の年間作品を対象として、選者より候補者五名の推薦を求め、高野、影山、桑原、狩野、宮里、小島、木畑、大松、田宮、津金、小山、福土、藤野、風間、田中、橘、水上比、編木、原質、水上美、大野、松屋の各氏より回答を得、被推薦者は十八名であった。編集部では、その集計をもとに六月十七日編集会を開催して検討し、黒石、孝と榛葉貞代の受賞を決定した。ここに、選考資料となった推薦文と推薦作品を整理して掲載する。推薦作品抄は推薦の多かった作品を前の方に挙げてある。

A・

1位 黒石 孝

技巧を弄しない真直ぐな詠風だが、調べは緊密で過不足のない措辞は実力を感じさせる。コロナ禍の苦境の人々を直視する歌、新濁の風土に根ざした歌に温みがあり、対象への眼差しがやさしい。

2位 榛葉 貞代

明るく瑞々しい歌の数々は幸福感にみちて愉しい。場面の切り取り方や比喩も巧みで映像的。年齢を感じさせない感覚の鋭さがあり、よく鍛錬された言葉選びが秀逸。

3位 斎藤 美衣

大胆と繊細を併せ持つ作者。日常詠でありながら、読者を異世界へ連れていくてくれる魅力がある。

4位 康 哲虎

時に含羞やユーモアを感じさせながら、アイデンティティーの確認に力がこもる。愛情たっぷりの家族詠もいい。

5位 勝山 和美

入院を繰り返す母を看取りながら自身の心を見つめ、整理している。叙景歌でありながら心象でもある景は美しく哀しい。

1位 黒石 孝

地方の信用組合のトップを務める。地元企業を支援する仕事柄、生活者への目線が温かい。郷土愛が強く、風土とそこに暮らす人間を多面的に詠んで、厚みがある。

2位 斎藤 美衣

子育てをしつつ、家業の経営にたずさわる。多忙な暮らしの中でわき起こる個としてのかなしみを、抑えた調子で陰翳ゆたかに、やわらかな言葉で表現する。

3位 榛葉 貞代

時には自らの老いを詠むが、囁目詠、家事詠にしても、意欲的でパワフルなところがある。言葉を飾らず、思いを率直に詠んでいて、

B・

4位 森田 則子

夫、子、孫との穏やかな日常が作品のベースだが、信頼し合う複数の友人を詠んだ歌にも佳品がある。元看護師で、時おり化学的知識が作品に表れる。

5位 康 哲虎

元プロボクサーで、今は看護師。在日朝鮮人であることが、詩情の底にある。しかし、歌の調べは軽快で明るく、口語を多用した自然体の歌を作る。

1位 黒石 孝

広く社会に対して、また身近な自己の身辺に対して、何かを究明しようとする視線が、鋭い調べに載せて歌われている。

2位 斎藤 美衣

ささいな日常にせよ、決まりきった自然界の推移にせよ、作者の手にかかるとたちまち不可思議な

ワールドへと変ずる。

3位 榛葉 貞代

自然と一体化した日々を過ごす充足感が、ユーモアを交えながら素直に歌われていて、読む者を幸福にしてくれる。

4位 佐々木佳子

さまざまに揺れ動く思いを的確にとらえ、それらを細やかな情感で裏打ちしながら表出している。

5位 吉本 由美

長らく入院していた母の死を迎えるまでの心の動きを、感情に溺れることなく、詩情を込めて歌っている。

1位 黒石 孝

コロナ禍の現実から直面する職場にあり、真正面から現実を受け止めた歌。逃げようとせぬ心の中にその地を風土を愛する心が視かれて切なく胸を打つ。

2位 康 哲虎

D・

コスモス賞候補推薦・集計と作品抄

黒石 孝……………68点

廃業の数とどめなく策もなく会議の窓を初夜打つ

産土の食味は風土早春の海に足浸け石蕁採る人

無利息のゼロゼロ融資押し込みで銀行が走るコロナ禍支援

花火師の女子が手縫ひの布マスク火花咲く刺繍うつくし

馬鞍田、深田、谷の田、瓢箪田、むかし棚田の跡を辿りぬ

ネズミ獲りびつしり仕掛け妻が見る秘密と嘘の韓国ドラマ

も言はぬ小さな欠伸くり返しみどりご眠る冬日の部屋に

けふ雨水田植ゑの水が気にかかるとのちの雪を待てどまだ来ず

擬宝珠の若葉、独活の芽、土手の草 外出自粛して匂を食む

残りたる担保の土地の広く見ゆ漁具漁網など取り散らかして

合歓咲けば夏の陽を浴び遊びたし不要不急の人出となりて

椿の木腹いっぱいに風を喰らひ花ゆすりつつ大笑ひせり

歌生るる疼きにも似てひとところ林の奥に日差しうごける

無利息と言へど借金今のうち借りておくとはいかにも無謀

テープ巻かれ明日は伐らるる合歓の木が枝さし広ぐ蟬を鳴かせて

榛葉 貞代……………65点

ウィッグが飛びはせぬかと抑へつつ菜の花畑のランウエイに入る

花虻も天道虫も菜の花の黄に溺れをり夕陽がしづむ

茹で菜花酢みそで食ぶる夕まぐれ ドクターイエロどこを走るや

夫が獲り軽トラの妻に放るとき黄にかがやけりキャベツのお尻

海原に囲まれ動けぬ列島を逆袈裟懸けに台風が切る

少年が本を閉ぢれば凭れるし山桃の木も眠たいと言ふ

すつぽりと掌に収まりてしづかなり熱れいちじくのふかきむらさき

菜の花の束を解きて一本を夫の書斎の机上に供ふ

親を詠めば親への、妻を詠めば妻への、子を詠めば子への愛の目差が感じられる。広げた枝の下に生命を育むがっしりとした大木のような男の歌。

3位 吉本 由美

大阪人らしいおかし味のある歌も楽しいが、母との別れの歌もしみじみと心にしみた。

1位 黒石 孝

コロナ禍の現実を描き出す職場の歌に、作者ならではの視線を感じた。また新渇の風土に根ざした歌や、家族を思う歌など、素材が幅広く、力量を感じる。

2位 吉本 由美

父母を詠んだ歌、特に母の細りゆく命を見つめ、看取った歌は絶唱である。軽いタッチのユーモアある作品が魅力的な作者だが、今年

は歌に深まりを感じた。

3位 森田 則子

亀も犬もみな家族という、身の回りの生き物に向ける眼差しが温かい。感覚の冴えた歌も魅力である。

4位 斎藤 美衣

スケールの大きい発想は、独自のもの。枠からはみ出そうとする詩想を感じ、今後が楽しみである。

5位 榛葉 貞代

比喩やオノマトペなど、表現の

工夫が見られ、この一年は、歌の幅を広げた。

1位 榛葉 貞代

生活の中の詩情を大切にしたり丁寧な作歌姿勢に魅力を感じる。韻律も滑らかで愛唱しやすいことも作者の個性である。

2位 黒石 孝

地方の特色を掬った作品に個性が光る。農業従事者としての矜持が感じられる作品、家族に注がれる眼差しが温かい作品に心惹かれた。

3位 斎藤 美衣

難解な表現を意図的に避け、それでも個性として屹立する作品が魅力的。どこかアンニュイを感じさせる歌も目立ち、多面的な才能を感じさせてくれる作者。

4位 佐々木佳子

日常の暮らして出会う小さな発見を独自の言葉で詠う。常人の及ばない微細な感覚を生かした作品に見所がある。

5位 康 哲虎

口語を積極的に使った作品はスピード感がある。内省的な眼差もあり、今後が楽しみな作者である。

1位 榛葉 貞代

色彩を交えながらの心情の切り取りに魅力がある。夫への心遣いがスマートで心憎い。「食うな」

はらはらのコロナ対策「な」の縛り 出るな・群れるな・喋るな・食ふな

踏み入りて屈めば波に浮くごとし背泳ぎしたい菜の花畑

ふらここの揺れの向かうに夕陽あり菜の花畑ずつと菜の花

冷やしたる化粧水パパンと頬に打ちまた会ひにゆく惚けし姉に

縁側に花ばあちやんが座りゐて一ひ匂ねれり 柿の葉ひらり

よく笑ふ子だくさんの家の風呂のやう軽トラックにキャベツ積まれて

生真面目な子に作り置くフリフリのフリル多なるワントンスープ

斎藤 美衣……………37点

小手毬の白がこつくり濃くなりてああセーターを洗はねばならぬ

朝ごとに父の電話を鳴らすなりいまのわたしは小さな港

一秒もずれない時計腕にはめ駅に向かへばみづみ見たし

骨組を確かめてゐるうつし身のからだを人と重ねるときは

寒がつてゐる文庫本をポケットへ寒がつてゐる右手が入れる

燃えるごみとわたしが言へば燃やされるごみと子は言ふティッシュを捨てつ

聞こえますか、聞こえますよとそれだけでけふの会議が終はればいいのに

なんといふ大きな眠り世界中わたしを置いて眠つてしまつた

春の陽は成層圏を通過してマスクを通りわたしに届く

片岡 絢……………33点

青空が広がつてゆく 恋をしてゐないわたしにかなしみはない

同僚とランチのあとは顔を真顔に戻し自席に座る

のんびりと生きてゐる子だゆやゆよん我の子だしなのんびり生きる

右おつぱい左おつぱいそれぞれに味ありイチゴとリンゴださうだ

のそのそと毛布を引いて起きてきてああ今朝もまだ三歳のまま

女性参政権獲得までの道 その先の家事分担の道

ウイルスといふより同調圧力によつてマスクをしてゐるのかも

吉本 由美……………25点

空わたる鷺のつばさをとほり来し白光はわれの瞳でをはる

煮沸など思ひも寄らず鍋のなか干瓢のやうにマスクがをどる

等の「な」の否定の力に着目しコ

ロナ禍を詠む。詩が潜む箇所を掘

む芽えを思う。

2位 黒石 孝

幼きものへ向ける目の優しさを

思う。自然から読み起こす歌にそ

の土地と人が捉えられる。コロナ

禍での無利息融資を見逃さない。

何か旨味があるのだ。

3位 斎藤 美衣

反対方向からの見え方の違いに

気付かせてくれる。リモート会議

の開始であることがわかる歌の時

代になつてしまつた。

4位 吉本 由美

話で聞くしか知ることのできな

い世界に思いを馳せる自在さに魅

力がある。心惹かれた様を丁寧な

歌に反映する。

1位 榛葉 貞代

菜の花、キャベツ、ブランクコ：

身近にあるものを題材にとり、奇

ててらうことなく表現する。的確

な情景描写をとおして静かに詩の

世界を展開する。

2位 吉本 由美

コロナ禍における母との別れが、

時の経過のままに静かに表現され

ている。作者とともに別れを経験

するかのような、読者の胸を打つ

作品群となつた。

3位 黒石 孝

新渇に住み、確かな視点から、

社会を、そして身近な生活を見つ

め、堅実に詠いあげる。その目が

とらえた景色は、今という時代を

鋭く描いている。

4位 康 哲虎

常に具体のしつかりとしたリア

リティある作品を詠む。外国籍の

人として、あるいは年頃の娘に向

かう男親として、それぞれの顔を

作品にのぞかせる。

5位 佐々木佳子

作中の視点と発想の意外な展開

が魅力的である。身のまわりの事

物から飛躍していく世界が描かれ

る。いっぽうで身近な題材もしつ

かりと詠われている。

1位 榛葉 貞代

歌のリズムに健康的でユーモラ

スな味がただよう。自己を客観的

に冷静にとらえ、人生を前向きに

生きる作者の姿が心地良い。

2位 佐々木佳子

風土に心を寄せ、一貫して生き

るとは何かと言う問いにむきあい、

人間存在の不可思議さを詠い上げ

ている。

3位 黒石 孝

コロナ禍にある不況下の社会情

勢を見つめ、そこに身を置く職業

人として悩み、観察し丁寧に詠み

続けている。

古女房、古夫なればもうとうに実践中なりソーシャルディスタンス
四季のなき病室の母に持ち来たり紅葉、黄葉のひとひらみひら
病む顔を「来たよ」と覗けば母は笑みあわゆきほどに明りてゐたり
らふそくを点すごとくに病床の母と語らひし二年三ヶ月
佐々木佳子……………24点

「火の鳥」を読みつつ見やるドアにゐるクサカゲロウのひとつの存在
果てるまで生きねばならぬ生きるため食はねばならぬ米買ひにゆく
新聞を見つめ見つむる閑上の空にかかれる大虹の橋
あの時のわたしは髪をのばしてたな（あいまよん）の曲なにか懐し
春の雪しめやかな雪さよならの涙にとける旅だちの雪
ニンゲンの顔といふのが見えてきたウイルス防ぐマスクをしても
森田 則子……………17点

「悲しいさあ」電話の向かうに首里城の炎上を泣くウチナーの友
どれもみな〈男〉が先の性別欄まるくきれいに〈女〉を囲む
一世紀の時の重みよウエブスター辞書のWのかざり髭跳ぬ
犬の胃から十円玉を回収しひと月分の年金が消ゆ
伊沢 玲……………13点

茶碗蒸しつくらんとして割る卵コンコンベカリやうやくの秋
冬晴れの午後の川瀬のしらさぎの動かぬ脚を過ぐる水流
青空と宇宙の境おぼろにいまはのきはの明るさのあり
入院し二日目の夜浮腫引きて一足跳びに父は逝きたり
康 哲虎……………11点

キムチを食べ日本酒を飲み歌を詠む特別永住者としてわれは
十六のわれは拒みき外国人登録証の指紋押捺
スシローが建てばいつしか無くなりぬ父と通った小さな寿司屋
美しいシャドウボクシングのような歌集を閉じる 速くて見えぬ
吉田 史子……………7点

二人子を抱きしむることもうなくて手持ち無沙汰なるわれの両腕

4位 斎藤 美衣

物の存在を自己の存在に重ねながら人間存在のはかなさと孤独を詠む。詩情豊かな作品。

5位 小沢 まさき

日常周辺のなにげないものの中に自分の分身を見ているように捉え詩的に表現する。

J・

1位 榛葉 貞代

大胆で繊細な詠み方に魅力を感じ。オノマトペ、比喩が独特で歌が活き活きしていて、ユーモアもウィットもある。特に菜の花を詠んだ歌が優れている。

2位 佐々木佳子

数年前から注目している。表現力が豊かで、歌はバラエティに富む。両親を詠んだ歌は、温かく作者のやさしさが滲んでいる。

3位 森田 則子

コロナ禍で家にいる日々を題材に、丁寧に歌を詠んでいる。どの歌にも作者の思いやりの心があつて、ゆとりを感じる。

4位 吉本 由美

母親を詠んだ歌に惹かれた。的確な言葉選びが、びたりと定型に収まっている。

5位 黒石 孝

作者の住む新潟を詠んだ歌は、その地方の香りがして秀逸。社会詠も鋭い。

K・

1位 榛葉 貞代

しつかりとした詠み口の中に作者独自のユーモアが光る歌が多い。リズムが良く軽妙な味わいがある。

2位 佐々木佳子

物事をよく観察し丁寧に詠む。表現が的確で景がくつきりと浮かぶところが良く、安定している。

3位 吉本 由美

細やかな心の揺れを表現豊かに詠み、魅力がある。特に母を詠んだ歌は心に沁み入る。

4位 黒石 孝

比喩や言葉の選択が豊かで冴えている。風土や自然を詠んだ歌も情感があつて深い。

5位 斎藤 美衣

日常から詩を生み出す力を感じる。日常の何気ないことに目をやり愛情を持って歌にしている。

L・

1位 奈良橋幸子

和語を巧みに用いて、感覚的世界を見事に詠み上げている。失われた時間を甦らせるような世界は、実に魅力的である。ひらがな表記も絶妙である。

2位 吉田 史子

北国の日々の暮らしを抒情性に富んだ表現で詠んでいて、味わい深い作品が多い。郷愁を誘う作品が昨年は多かった。

拾ふとは寂しき行爲無防備な背中さらして柝の実ひろふ
思ひ出をひろふごとくに繰るページ古き家並みの写真集なり
奈良橋幸子……………5点

陽のひかりひとすぢ残る水の上なくこゑもたぬものたちは飛ぶ
雨夜なり古き音盤にいざなはれくわあんと過去のある時にゐる
雨後の木の瘤光りをりはつかなる濁りを持つてゐるわれば近づく
吉田美奈子……………5点

かはせみを見しこと今日の葉としわが誕辰のページ閉ぢたり
追伸は短きが良し葉桜の中より散りてはなびらひとつ
錠剤のこぼれし一粒見つからず しんがりを行く生も良きかな
有川知津子……………4点

夜ごと夜ごと川は閉ぢたり草臥れたわれがうつかり泳がぬやうに
オートロックのパネルの内にこびとゐて停電の午後を発電しをり
金子智佐代……………3点

陽子線癌にびたりと中てるため瘦せちやいけない太つちやいけない
トドに似る流水日夜海に向き今日は日暮れを吠えはじめたり
中村 仁彦……………3点

痛む手でやつと結んだ屠蘇飾りまつすぐにして来る年を待つ
湧く水の波紋にうつるきれぎれの山のみどりを平手に掬ふ
一瀬 武子……………1点

手掌に大きルビーの三つありことし最後のわがミニトマト
夏帽子買ふとあれこれ試着してどれも似合ふと思ふ自惚れ
勝山 和美……………1点

剪定を終えて庭師は病棟に草の香のこし帰りゆきたり
喪失の海を泳いでゆくやうなかなしみふかし今年の夏は
北 祐二郎……………1点

ゆふだちの過ぎて光れる草叢に揺らめく蜘蛛の囀といふ銀河
あかときの湖の静寂を破りたりゆくりなく落ちきし青胡桃

3位 吉田美奈子
菌切れの良い、断言的な歌い方
に一層磨きがかかり、作品の奥行
きもさらに深まっている。

4位 片岡 絢
子育ての日々を非常に新鮮な発
想で詠んでいる。ただ、昨年は翳
りのある作品が目立ち、苦境に耐
えて詠む姿勢も評価したい。

5位 樺葉 貞代
日常を上手く切り取り、しかも、
オノマトペを効果的に用いて、リ
ズム感の良い、明るい歌を多く詠
んでいる。

1位 片岡 絢
幼子と夫を詠み、生々しさと澄
んだ詩人の魂が共存するのがユニ
ークだ。個人の生活を詠いながら、
人の世のサイズを超えた視点があ
り、個性が際立っている。

2位 伊沢 玲
折々の思いを作品化する能力が
高く、言語感覚も豊かだ。母や、
妻や、社会の一員としてのバラ
ン感覚に秀れ、歌の韻律自体に魅
力がある。

3位 金子智佐代
光景の切り取りがシャープで、天
災や病など重いテーマも、理性的
に詠う。作歌意識の高さは頼もし
く、芯は温かい心の持ち主だ。

4位 吉田美奈子

自然詠に秀れて、繊細にもダイ
ナミックにも表現できる人だ。正
統的な歌の姿には安定感があり、
静かな心もちへ読者をさそおう。

5位 樺葉 貞代
現代的なスピーディーな文体で
身めぐりを自由に詠う。擬音、擬
態語の豊かな感覚派だが、カラッ
とした中にも、心情は深い。

1位 片岡 絢
若々しい青春性のある作風の中、
子育てを通した社会詠が鋭い。夫
の歌はアイロニーが効いて、夫婦
の在り方を世に投げかけて来る。

2位 黒石 孝
土地に根付くコロナ下での社会
詠には第一線で働く臨場感がある。
自然への視線は詩的に飛躍させて、
おおらかさを感じる男歌である。

3位 有川知津子
負荷のかからない文体に乗せた
故郷や母、亡き祖母を恋う作品は、
会えないコロナ禍の中ますます深
化している。

4位 森田 則子
日常の細事を丁寧な掬い取る一
首一首に工夫があり、家族への愛
に溢れている。

5位 一瀬 武子
九十歳を過ぎてなお自由。老い
の辛さを詠んでも伸び伸びとした
詠みが魅力的。